

夜の森を飛び交う（ムササビ・モモンガ）

高野山寺領森林組合 西田 安則

高野山の森は、スギやヒノキを中心に針葉樹で覆われています。その多くは、樹齢六〇年生前後の昭和三〇年代に植樹された森です。し

かし、奥之院の大杉林（和歌山県指定天然記念物）のように数百年も経った森も少なからず存在しています。

さて、その奥之院の森を夜に歩いていると杉木立の高いところから、グウルとかギャーギャーとか奇妙な声が聞こえてきます。それが、ム

ササビです。時として、白いお腹を見せながら木から木に飛び交う姿を見た人も少なくないでしょう。

ムササビは、本州、四国、九州に生息し、毛色により幾つかの亜種に分かれているが個体差もありその区別は難しいみたいです。因みに近畿に生息するム

ササビはワカヤマムササビといわれているようです。さて、ムササビの大



ムササビ（撮影 林育造）



モモンガ

きな特徴は体の被膜を使って木から木に滑空する行動です。時として二〇〇mもの距離を滑空することが、できるみたいです。このように樹間を滑空しながら移動する動物にモモンガがいます。モモンガとムササビの大きな違いは体の大きさです。ムササビは、尻尾をいれると、七〇八〇cmにもなる、国内最大のリスの仲間、モモンガはそれより遥かに小さく三〇cmにも満たない大きさです。ムササビは「空飛ぶ座布団」、モモンガは「空飛ぶハンカチ」とよく言われます。

最近、モモンガが増えて来ているようで、高野山でも見る機会が増えてきました。もう少し増えれば、ムササビとモモンガが同時に飛び交う姿が見られるかもしれません。

霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより 第134号

令和2年4月13日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736-56-2029
URL <http://www.reihokan.or.jp>

利用案内

■開館時間
11月1日～4月30日
8時30分～17時00分
5月1日～10月31日
8時30分～17時30分
年末年始のみ
(展示替時 臨時休館あり)

■拝観料 大人 600円
高・大学生 350円
小・中学生 250円
高野町に住居票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり

令和2年度春期企画展 「ほとけさまと動物たち」

4月18日(土)～7月5日(日) まで

第134号 目次

企画展のご案内	2～3
収蔵品の紹介106	4
高野山の古建築 第三十六回	5
特集 文化財防火設備	6～7
高野山の考古学 (二十四)	8～9
高野山の文書 (二十)	10
高野山霊宝館からのお知らせ	11
高野山の生き物 第三回	12

毎月21日(弘法大師の日) ご来館の方にプレゼントあり！ ホームページ割引券もご利用ください

文化財を守る 放水銃
1月24日に加盤で行われた防火訓練の様子。放水銃と、橋側からはポンプ車で放水しました。(詳細は6ページ)





重文 屏風本尊 中国唐時代 竜光院



重文 一字金輪曼荼羅図 鎌倉時代 遍照光院〔後期〕



重文 蝶形磬 鎌倉時代 親王院
密教修法で打ち鳴らす磬、
蝶の形は稀少です。



重文 舞楽装束類（天野社伝来）のうち蜜絵袍
室町時代 金剛峯寺
同じ裂地が宝簡集の表紙に
使われています。



瑞花双鳥八稜鏡
平安時代 明王院



重文 両頭愛染曼荼羅図
鎌倉時代 金剛峯寺〔前期〕
獅子と象に乗り、狐と邪鬼を狙う
制吒迦・矜羯羅童子。



国宝 仏涅槃図 平安時代 金剛峯寺〔4/25(土)～5/10(日)展示〕
日本現存最古の涅槃図。ゴールデンウィーク期間限定展示です。

次回予告

令和2年度夏期企画展

「如来－NYORAI－」

令和2年7月11日(土)～9月27日(日)

重文 阿弥陀如来及両脇侍立像
五坊寂靜院 展示予定

※ミュージアム法話

(お坊さんによる法話と展示解説)

5月9日(土)、6月20日(土)
13時より約45分間

※ミュージアムトーク

(学芸員による展示解説)

4月29日(木)祝、
5月18日(月)〔国際博物館の日〕
13時30分より約1時間

いずれも予約不要、参加費無料(要拝観料)
イベントは変更する場合があります。

同時開催

小特集「写真でみる高野山の登録有形文化財(建造物)」

※文化財の保存上、展示品が変更される場合があります。
※期間中、一部展示替を行います。

■民俗資料
未指定 清高稲荷社関係品(小祠、木札ほか) 地蔵院 ※初公開

■工芸
重文 舞楽装束類(天野社伝来)のうち蜜絵袍 金剛峯寺
重文 蝶形磬 親王院
未指定 瑞花双鳥八稜鏡 明王院
未指定 灌頂法具類(仏具類)のうち法螺・払子 竜光院

■書跡
国宝 金銀字一切経(中尊寺経) 金剛峯寺
国宝 宝簡集巻二四・五二(表紙裂展示) 金剛峯寺
国宝 又続宝簡集巻六二・六八(表紙裂展示) 金剛峯寺

■彫刻
重文 文殊菩薩及使者像 遍明院
重文 屏風本尊 竜光院
未指定 馬頭観音立像 金剛峯寺

主な展示品

■絵画
国宝 仏涅槃図(4/25(土)～5/10(日)展示) 金剛峯寺
重文 両頭愛染曼荼羅図 金剛峯寺〔前期〕
重文 六字尊像 宝寿院〔前期〕
重文 一字金輪曼荼羅図 遍照光院〔後期〕
重文 普賢延命菩薩像 正智院〔後期〕
重文 十卷抄 圓通寺
未指定 雨宝童子像 五大院
未指定 弘法大師及二天弟子像 竜光院

令和2年度 春期企画展

「ほとけさまと動物たち」

令和2年4月18日(土)～7月5日(日)まで

前期 令和2年4月18日(土)～5月24日(日)

後期 令和2年5月26日(火)～7月5日(日)

会期中無休

※国際博物館の日に協賛し、5月18日(月)を無料開館日とします。

古来より人々は、さまざまな動物たちと関わりながら生活してきました。信仰の世界においては彼らの、人間には無い能力に畏敬の念を込め、神仏の使い、あるいは乗り物などの役割を与えられ、神格化・仏格化されています。また多様な姿は、装飾デザインとしてもあらゆる場面で目にするかと思えます。本展では仏教・密教の世界にみられる身近な動物、日本にはいない動物、空想上の動物などを高野山に伝わる宝物を通じてご紹介します。



松平家の霊屋を背面側から見る 右手の母の霊屋は切妻造り、左手の松平秀康の霊屋は入母屋(いりもや)造りとなっている。



母の霊屋の正面を見る 中央に石製の扉を建て込み、扉上に阿弥陀如来を表す梵字が刻まれている。左右には仏像が浮き彫りに彫り出されている。右は不動明王、左は四天王の一つ増長天のようだ。



松平家の霊屋を参道から見る 左手前が母の霊屋で、右奥が松平秀康の霊屋。墓域の四周を石柵で囲い、正面に鳥居を建てるのは、高野山の大名墓の特色である。



秀康の霊屋の正面の全景 建物は、扉と壁で閉ざされた「母屋」と、吹き放しの「庇(ひさし)」で構成され、入母屋屋根を架ける。正面中央間には、柱上に組物を置いて軒唐破風(のきからはふ)を付けている。

連載

高野山の古建築

重要文化財 蓮花院 松平秀康及び同母霊屋 第三十六回

鳴海 祥博

奥之院にある御大師さまの御廟に向かう約2kmほどの参道沿いには、二十万基ともいわれる様々な形や大きさの無数の墓石が建ち並んでいます。御廟を目前にした御廟の橋の手前で参道は二手に分かれますが、ちょうどその分岐点の左手に、石造りの建物が二棟並んでいます。今回紹介する「松平秀康及び同母霊屋」です。全て石で造られた日本ではとても珍しい建物です。内部は板石敷きの床となっていて、そこに墓石がひっそりと安置されています。この石造の建物は墓石の覆い屋として建てられたものです。墓石や位牌を安置するこのような建物は「霊屋」と呼ばれています。

この二棟は、向かって右が松平秀康の墓石を納めた霊屋で、慶長十二年(一六〇七)に子の秀直によって建てられました。左は秀康の母の霊屋で、慶長九年(一六〇四)に秀康が建てたものです。

松平秀康は戦国時代の大名

で、徳川家康の次男です。十一歳で豊臣秀吉の養子となり、十七歳で関東の名門結城氏の婿養子となって家督を継いで大名となります。慶長五年(一六〇〇)の関ヶ原の戦の後に、越前国六十八万石の大名として福井に移りました。この時秀康は結城姓を名乗っていますが、その後徳川一門として「松平」姓を名乗り、福井藩越前松平家の初代とされています。

秀康の母は名を「於万」といい、愛知県知立市にある古社、知立神社の神主家永見氏の娘でした。「於万」の叔母が家康の母なので、家康と秀康の母は「いとこ」に当たります。家康の側室となって「小督局」と称されたようです。

霊屋の建てられた慶長九年に、母は五十六歳で存命でした。つまり母の霊屋建設は、生前にあらかじめ死後の菩提を願う「逆修」供養だったのです。当時生前に供養を行うことは珍しいことではなかったようですが、この時期に秀康が母の墓所、それも前例のない石造りの建物を造って生前供養を行ったのは、なぜなのでしょう。

秀康が高野山に母の霊屋を建てた前年、父家康は征夷大

将軍となり、天下統一を果たしました。秀康の母「小督局」は天下人家康の側室という地位にあること、そして結城姓とはいえ秀康自身も天下人家康の次男である事を誇示したかったのではないか、そう思えてしまうのです。

この奥之院に数多ある大名の墓の中で、特異な姿の石造りの「霊屋」は、天下人家康の次男だからこそ建立できた特別なものだったに違いありません。

越前松平家の二棟の霊屋は、何れも福井市の足羽山で産出する「笏谷石」と呼ばれる石材で造られています。笏谷石は火山灰が堆積して凝結した石で、美しい青色と、柔らかくて加工しやすいことが特徴です。古墳の石棺や、石仏、また火鉢など様々なものに使われています。福井県にある丸岡城では瓦状に加工して屋根葺き材として使われています。

高野山の二棟の霊屋は、その四周を囲む石柵、敷地全体に敷き詰められた板石まで、全ての石材が、秀康の居城のある福井から、陸路なら三〇〇kmはある高野山まで、恐らく牛馬や人力だけで運び込まれたものなのです。

収蔵品の紹介 106



上から1～3巻 部分



参考 昭和9年朝日新聞社発行 小説弘法大師 表紙(右)とカバー 復刻版は金剛峯寺の売店で販売しています。

近代日本画、あるいは高野山のことに詳しい方ならば木村武山の名前を聞いたことがあるかと思います。木村武山(一八七六～一九四二)は茨城県笠間市生まれの日本画家で、岡倉天心率いる日本美術院の一員として横山大観・下村観山・菱田春草らと共に当時の日本画壇を牽引しました。花鳥画と仏画を得意とし、高野山では伽藍金堂(昭和七年(一九三二)完成)の内部屋画や、金剛峯寺新書院(通常非公開)の障壁画を手がけています。

本作品は、昭和九年(一九三四)が弘法大師御遠忌一一〇〇年の節目の年にあたり、それに合わせて朝日新聞で連載された『小説 弘法大師』の挿絵原画を巻子に仕立て、大阪朝日新聞社によって奉納されたものです。同年一月に連載が始まった小説の執筆は直木三十五(一八九一～一九三四、「直木賞」でその名が知られる小説家)が担当していましたが、二月に直木が亡くなったため、大阪朝日新聞社社員で論説委員を務めた釈瓢齋(本名は永井栄蔵、一八八一～一九四五)が続編を担当しま

した。本作品四巻のうち一巻が直木執筆分、二・四巻が釈瓢筆分で、武山による挿絵のみが収録され、本文はありません。また一二巻は紙に、三・四巻は絹に描かれています。

附属する『弘法大師文化宣揚会記録』上・下巻には大阪朝日新聞社が御遠忌一一〇〇年を宣揚(広く世の中に示すこと)するために、小説の連載や講演会、宝物展覧会、演劇(主演は中村鴈治郎)の開催など、数々の記念行事を行った経緯が非常に詳しく記されています。また寄進状によると、昭和十年八月三日に金剛峯寺霊宝館(高野山霊宝館)に奉納されたことがわかります。

当時の新聞はモノクロ印刷であるため、墨一色で描かれていますが、古い絵巻のような品格漂う雰囲気の中に、仏画を得意とした武山による細密な仏像の描写や、生き生きとした人物・動物の姿など、見所の多い作品です。

(福形安希子)

※春期企画展では第三巻のみ展示します。

しょうかかん ○消火管

高野山内には文化財指定建造物や寺院を中心として、網の目のように消火用の水道管（消火管）が張り巡らされています。消火管は高野町が管理するものと、高野山防災協会が管理するものの2系統があり、万が一どちらかが使えなくなっても、もう一方がカバーする、という態勢をとっています。

高野山境内の大半に敷設された「山内文化財消火管」は、井戸水と山水を高野山高校山上にあるタンク（900トン）に溜め、水圧を利用して自然流下で放水できるようになっています。このため停電時でも火災に対応できます。御廟や御供所周辺は「奥之院単独防災設備」（山水を水源とし、ポンプを起動して放水する）が設置されています。

霊宝館敷地内にある消火栓。火災発生時には、ホースを取り付けて消火作業にあたります。



左：伽藍の北にある池
下：千手院観音堂の貯水槽表示

高野山には防災用に多くの池や、地下の貯水槽が設けられています。金剛峯寺前の駐車場の地下にも、貯水槽があります。



○ガス系消火設備

収蔵庫にはガス消火設備（窒素ガス）、新館にはハロゲン化物消火設備（ハロン1301）が設置されています。前者は酸素濃度を下げること、後者は化学的に燃焼反応を中断させることで消火し、水とは違って電気機器や文化財へダメージを与えることなく、また迅速に消火できるのが特長です。

○フレイムチェッカー

万が一、不審火が発生した場合、早期発見が重要です。収蔵庫を中心にセンサーで炎を感知し、発報するシステム「フレイムチェッカー」を配備しています。

■霊宝館の防火設備



てんすいおけ 番外編：天水桶

金剛峯寺大主殿の屋根に設置されている、大きな桶です。雨水をため、火災発生時には消火に使います。かつては重要な防火設備でしたが、現在は建物の周囲に消火栓が配備されています。皆さんがいつも気になっているであろう、桶の中の写真は貴重！



現在の桶は平成9年（1997）に新調したものです。

ほうすいじゅう ○放水銃

壇上伽藍、奥之院御廟、徳川家霊台、大門などに設置されています。手動で方向を調整し、強力な水圧で遠くまで水を飛ばすことができます（表紙参照）。



ドレンチャー放水のようす

左上：徳川家霊台

右上：不動堂

こちらは屋根に散水管があります。

下：伽藍御影堂

○ドレンチャー

ドレンチャーは建物の周囲や屋根に設置した管から水を噴射する装置で、消火用というより、周囲で火災が発生した時に、建物の延焼を防ぐためのものです。写真のように、水の壁で火の粉から守ります。

伽藍不動堂・御影堂、奥之院経蔵、金剛三昧院多宝塔、徳川家霊台などに設置されています。

○文化財用の消火器

通常、家庭や会社、学校などに設置されている赤い消火器は粉末や薬剤（液体）を噴射して火を消しますが、文化財の汚損を防ぐため、二酸化炭素消火器が設置されています。



霊宝館収蔵庫にて業務用強化液消火器（左）と二酸化炭素消火器（右）

特集 文化財防火設備

昨年はフランスのノートルダム大聖堂や、沖縄の首里城正殿など、貴重な文化財建造物の被災が相次ぎました。高野山は国宝の不動堂や多宝塔をはじめとする指定建造物や登録有形文化財、また数多くの文化財を所有する寺院が限られた空間に密集

する、特殊な環境の土地です。高野山の歴史は、落雷や失火などによる火災との戦いの歴史とも言えます。そんな高野山では現在、どのように文化財を火災から護る工夫がされているのか、その一端をご紹介します。

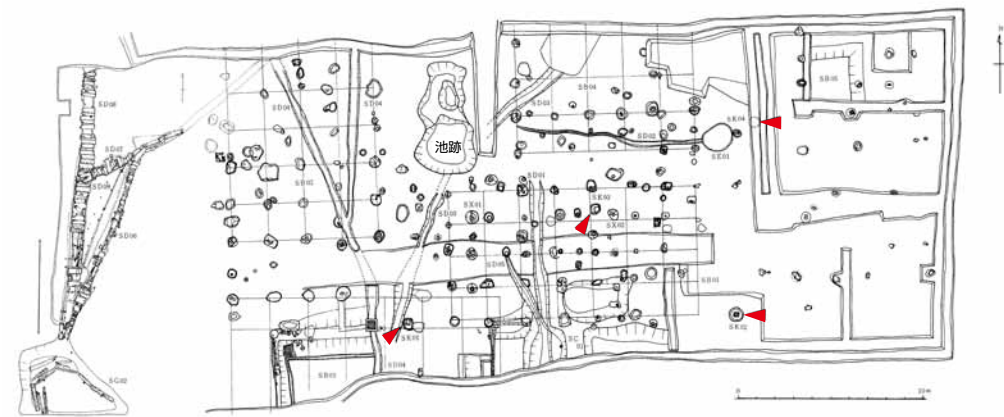
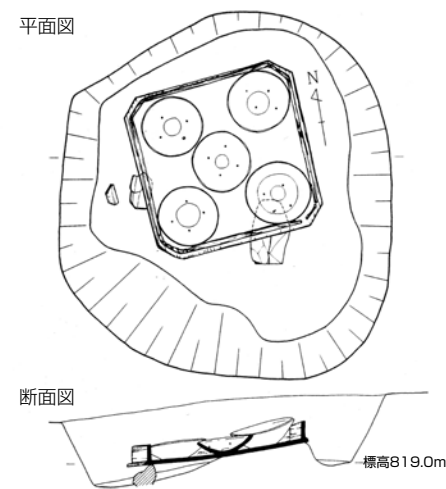


図1 宝性院跡の地鎮遺構出土地点（▲のところ）

平面図



断面図

図2 西南隅の地鎮遺構

ます。

地鎮の遺構

中心的な建物に伴うように見つけた地鎮遺構は、現地では四か所確認されました。いずれも直径約

六〇センチ、深さ約一五センチの歪な円形をした穴を掘って、その中に薄い板で作られた折敷の上に、五枚の皿を養子の五の目のように配置して乗せたものを埋めていました（図2）。見つかった穴のうち、一か所だけ中央の皿がずれていましたが、五の目に配置するのが本来の作法だったようです。

それは折敷の表面に皿を置いた跡が残っていたことから判明しました。皿は直径約一一センチ、高さ二、三センチを測るもので、内面から外面の一部にかけて薄茶色の釉薬が掛けられており、固く焼しめられていました。これは京焼とみられるもので、見つかった

た皿のすべてが同じ種類、同じサイズのものでしたので、四か所とも一連の作法によって作られた遺構であることが分かります。皿の中には何かを入れたような痕跡もありましたが、土が充満していたので何を盛ったのかは分かりませんでした。これらの皿を乗せた折敷は、木製で一辺約三〇センチの大きさでした。

四か所確認された地鎮遺構の位置は、先にご紹介した中心的建物の中央部から少し北寄りに一か所、建物の東南隅から真東へ約二メートル離れた地点で一か所、西南隅から真西へ同じく約二メートル離れた地点で一か所、北東隅から北東方向へ約四、五メートル離れた地点で一か所が、それぞれ見つかりました（図1▲）。このほか調査地区の中央北寄りの池跡の中から、同じタイプの陶器の皿

水野先生はこの時すでに五枚の皿を盛った折敷を埋めた遺構が、建物の中央付近と四隅の合計五ヶ所に埋めて、何かを行う遺構とその遺物であることを見抜いておられたのです。研究の大事さ、面白さを直接教えてもらった瞬間でした。

次号では水野先生が解明された真言宗の地鎮の作法について紹介します。

【参考文献】

岡本一士ほか一九八二『高野山発掘調査報告書』（財）元興寺文化財研究所

高野山の地鎮遺構①

宝性院跡（前編）

大阪大谷大学文学部歴史文化学科
狭川 真一



写真1 宝性院跡の発掘現場（北東から）

昭和五五年（一九八〇）の二月から七月にかけて、大師教会の中に新たに「教化研修道場」の建設が計画され、事前の発掘調査が行われました。調査された遺跡は、江戸時代と室町時代の二時期の遺構が確認され、室町時代では仏堂を思わせる立派な建物跡とそれに付属する小規模な建物跡などが確認されました。それらの遺構が無くなった跡に土をかぶせて埋め立て、整地した上に江戸時代の建物

などを建設していました。また出土した漆碗の底に記載された「宝性」の文字から、当時ここが宝性院と呼ばれていたことも確認されたのです。発掘調査は財団法人元興寺文化財研究所が担当し、当時学生だった私も参加させていただいた思い出の発掘現場でもあります（写真1）。

さて今回からは、高野山内で発掘された地鎮の遺構を紹介します。地鎮とは土木工事や建築工事などに先立って、その土地を護っている神仏を祀り、そこを利用していただくことの許しを得るための祭事です。なお今回ご紹介する地鎮遺構は、江戸時代の建物群に伴って出土しました。

江戸時代の様相

発掘調査地区の中央付近に建物跡が四棟分確認されました（図1）。全体が確認できた建物は、東西七間（二三、五メートル）、南北四間（七メートル）の規模を持つもので、この敷地内における中心的な建物と考えられます。この建物に関連した形で、今回紹介する地鎮遺構が見つかりました。また調査地区の中央北寄りに南北六メートル、東西三、五メートルの瓢箪形をした池が見つかり、調査地区の西端には板材を使った導水路とその水が注ぎこむ池跡が確認されました。ただ建物群より東側には何も見つかっていませんので、広場のようなものだったかと思っています。

高野山霊宝館からのお知らせ



修理前
パズルのようにバラバラの断片もありました。



巻かれた状態で破損・断片化が進
いた執金剛神立像・深沙大將立像(快
慶作、鎌倉時代、金剛峯寺蔵)の胎
内納入品「宝篋印陀羅尼」の修理
が完了し、3月30日に戻ってきました。

◎重要文化財(美術品) 執金剛神立像・深沙大將立像 胎内納入品 修理完了

3月30日に重文 四天王立像(平安時代、金剛峯寺蔵)のうち2軀が
修理を終え、霊宝館に戻ってきました。
既に修理が完了している持国天・
増長天像と合わせて4軀が揃い、現
在本館にて展示中です。

◎重要文化財(美術品) 四天王立像のうち多聞天・ 広目天像 修理完了

んでいた經典を慎重に広げて裏打ち
し、劣化を防ぐと共に展示可能な状
態になりました。新たな発見も期待
されます。

◎重要文化財(美術品) 不動明王・童子毘沙門天図像 修理完了

平成29年度より3ヵ年計画で行わ
れていた不動明王・童子毘沙門天図
像(平安・鎌倉時代、圓通寺蔵)の
修理が完了し、3月30日に再収蔵い
たしました。その後4月13日まで、
お披露目展示を行いました。



修理途中
文化庁、和歌山県教育委員会と
工程の確認と方針の打ち合わせ

◎重要文化財(美術品) 十巻抄 修理経過

平成29年度より5ヵ年計画で、重
文・十巻抄(圓通寺蔵)の修理が行
われています。3月に修理が完了し
た巻四は5月24日まで、巻五は5月
26日〜7月5日まで展示いたします。

◎拝観料変更予告

10月16日(金)より、約20年ぶりに拝
観料を改定することになりました。
一般 600円↓1300円
(団体20名以上は1200円)
高校・大学生 350円↓800円
小・中学生 250円↓600円

◎令和2年度のミュージアム 法話日程(予定)

本年度も開催いたします。ぜひご
参加ください。

5月9日(土) 6月20日(土)
7月11日(土) 7月25日(土)
8月8日(土) 8月22日(土)
9月12日(土) 10月17日(土)
いずれも13時より。日程は変更す
る場合があります。

◎新収蔵品

奈良県の幸腸延子様より金剛峯寺
への寄進を受け、「嶽弁財天像」と
の伝承がある紙本著色弁才天十五童
子像(江戸時代)を新たに収蔵しま
した。今後展示する機会があるかと
思います。



■133号の訂正

前号の特集「ミュージアム法
話」の内容に相違がありました。
お詫びして訂正いたします。

7ページ「御衣替え」下段
【誤】淳祐の右手をとり、
お大師様の左膝へと運びまし
た。
【正】淳祐の右手をとり、
お大師様の膝へと運びまし
た。

◎友の会会員募集

・会員証提示で会員本人のほか
同伴者3名様まで霊宝館と金
堂・大塔の拝観無料
・年4回発行の機関誌「霊宝館
だより」送付
〈年会費〉
一般会員(個人) 3,000円
賛助会員(法人) 30,000円
皆様のご入会をお待ちしてお
ります。

高野山霊宝館は令和3年(2021)5月、
開館100周年を迎えます。

お問い合わせ先 高野山霊宝館 TEL 0736-56-2029(代)

高野山の文書 (二十)

清高稲荷社で新発見!! 『神号授与状』

(地蔵院蔵) について

平成三十年(二〇一八)、高野山
内の稲荷神社の一つ清高稲荷社の境
内、社殿の整備が行われました。そ
の際、清高稲荷社に関わる古文書が
二点発見されました。一つは『神号
授与状』、もう一つは『山田阿波介
書状』(ともに地蔵院蔵)です。今
回はそのうち『神号授与状』を紹介
したいと思います。

そもそも、高野山と稲荷明神の関
係は、弘仁十四年(八二三)弘法大
師空海が嵯峨天皇から東寺を賜った
際、密教と国土の安泰を、稲荷明
神と契約したことに始まるとされま



神号授与状 地蔵院蔵

(釈文)

紀州伊都郡河根村
中西甚太夫
右依願
白柏正一位稲荷大明神
神号所申請如件
神祇管領長上家
文久二戊年 公文所(朱方印)
六月

す。そのため真言宗の寺院では、稲
荷明神を守護神として祀ることが多
く、高野山でも古絵図等で稲荷神社
が散見されます。清高稲荷社は、北
室院の東隣、バス停でいうと「蓮花
谷」と「刈萱堂前」の間に位置しま
す。江戸時代末期の史料『紀伊統
風土記』によると、興教大師覚鑓
(二〇九五〜一一四四)が前述の契
約にならない、稲荷明神を勧請したと
あり、覚鑓の創建した密蔵院の鎮守
社であったとも記されています。

の神号を授与した文書です。詳しく
見ると、紀州伊都郡河根村(現在の
和歌山県九度山町の一部)の中西甚
大夫の願いにより、「白柏正一位稲
荷大明神」の神号を与えらという内
容で、文久二年(一八六二)六月に
神祇管領長上家(京都吉田神社の
吉田家)の公文所(実務機関)によっ
て出されています。この文書と共に
発見された「寛文十年(一六七〇)
稲荷大明神木札」では「正一位」の
記述はなく、「明治十一年(一八七八)
稲荷大明神勧請木札」には「正一位」
の位が記されているため、この文書
の文久二年に初めて「正一位」の位
と「白柏」という名前を授与された
ことがわかります。「正一位」は人
もしくは神様の位で、十八世紀頃
にはほとんどの神社で「正一位」の位
を持ち、由緒ある神社の代名詞と
なっていたようです。ちなみに「白
柏」が正式名称で「清高」の由来は
不明です。

これだけでは表面的なことしかわ
かりませんが、発見されたもう一つ
の文書『山田阿波介書状』で内容を

補えます。この書状は、山田阿波
介有年(？〜一八九一)という人物
から前述の願主の中西甚太夫に送ら
れた書状ですが、甚太夫は京都の有
年のもとを訪れていたことがわかり
ます。有年は吉田家公文所の所属で
あったようですので、実際にはこの
二人のやりとりで神号授与が決まっ
たようです。また、甚太夫が申し込
んだご祈祷の品と「神号納」を有年
が送る旨も記されています。この「神
号納」が今回の神号授与にあたる
と考えられます。榎本直樹著『正一位
稲荷大明神―稲荷の神階と狐の官位
―』(岩田書院、一九九七)によると、
「神号納」は勅許を経て神階(神位)
を得る方法とは異なり、かなり安価
な札金で済んだことが指摘されてお
り、中西甚大夫のように個人が願主
の場合に重宝されたようです。また、
疫神齋(悪病災難除のお札)が三枚
送られた旨も記されています。今回
の発見では疫神齋も三枚見つかって
おり、この書状に記された疫神齋と
同一のものか調査研究が待たれます。
現在残っている高野山の稲荷神社
は少なく、清高稲荷社はその中の貴
重な一社です。今回発見された史料
が、清高稲荷社の歴史だけでなく高
野山の稲荷信仰の形態を解明する一
助となればと思います。(研谷 昌志)
※春期企画展にて本状を含む
清高稲荷社関連品を展示します。